

## 四肢機能障害があり、医療的ケアが必要な中学1年生の生徒が中学校で学ぶための教材の作成・確保や施設設備の整備の取組

### 1. 事例の概要

A生徒は、B中学校の特別支援学級に在籍する中学1年生の生徒である。ウエスト症候群による四肢機能障害がある。寝たり起きたりする動作や、歩行をすることが難しく、てんかんの小発作を頻発している。また、A生徒は、医療的ケアが必要な生徒で、胃ろうをしており、看護師が栄養や水分を経管注入している。

本事例では、A生徒が中学校で学ぶための教材の作成・確保や施設設備の整備の取組について述べている。具体的には、身体的学習や諸感覚（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）に働きかける学習、感情表現・意思表示を喚起する学習に関する教材を作成・確保したり、特別支援学級に電動ベッドを設置したり、また、その周囲には、医療的ケアに必要な、口腔清拭や吸引器・吸入器、胃ろう用器具、空調、加湿、給湯などの設備備品を備えている。更に、雨の日の登校でもA生徒が雨に濡れないようにするための屋根、通称「雨の日車椅子ステーション」を建設している。

これらの取組により、A生徒は小学校時代に比べて変化している。また、A生徒が私たちの学校になくてはならない存在であるという実感を、生徒も教職員も共通理解している。今後は、生徒一人一人の学習の実態を多角的に把握する視点や教職員間の連携、支援を要する生徒の理解、生徒一人一人に応じた教材・教具の作製など、これからも一つ一つの課題に取り組んでいきたい。

キーワード 教材・教具の作製・確保、ウエスト症候群、肢体不自由

### 2. 幼児児童生徒の実態

A生徒は、B中学校の1年生で、ウエスト症候群による四肢機能障害がある。寝たり起きたりする動作や、歩行をすることが難しく、てんかんの小発作を頻発している。また、A生徒は、医療的ケアが必要な生徒で、胃ろうをしており、看護師が栄養や水分を経管注入している。

学習面では、全身や四肢の筋緊張を弛めるマッサージや姿勢の保持（側臥位・前もたれ座位・うつ伏せ・風船マットでの横揺らし等）を行っている。また、天気の良い時には、学校の周りを車椅子で散策することもある。これらの一連の身体の動きに関する授業を特別支援学級で受けた後、交流及び共同学習で、通常の学級での授業を受けている。

### 3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 校内においては、教員間、介助員、看護師との連携を図っている。また、校外では作業療法士や理学療法士、医療機関との連携を図ることに努めている。【基礎1】
- 保護者との話し合いをしながら、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成している。また、計画した目標等をその都度修正をし、より適切な指導目標を探っている。【基礎3】
- 身体の学習や諸感覚（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）に働きかける学習、感情表現・意思表示を喚起する学習に関する教材を作製・確保し、指導の充実に努めている。【基礎4】



写真1 移動用折りたたみベッド

- 特別支援学級に電動ベッド及び移動用の折りたたみベッド（写真1）を設置している。また、その周囲には、医療的ケアに必要な、口腔清拭や吸引器・吸入器、胃ろう用器具、空調、加湿、給湯などの設備備品を備えている。【基礎5】

#### 4. 合意形成のプロセス

A生徒が中学校に入学するに当たり、保護者から支援の申出があった。具体的には、A生徒は、長期入院のリスクも予測されるが、看護師の配置を希望することや、施設設備等を充実してほしい旨の申出があった。そこで、B中学校では、A生徒の入学前から、小学校の担任や看護師と話し合いを行ったり、校長が家庭訪問を行ったり、B中学校の全教職員が小学校の授業や給食の時間を参観して、A生徒のB中学校での受け入れ準備をすすめていった。その結果、B中学校と保護者の間で、「A生徒が入学するまでに、車椅子に対応できる施設設備を整えること」「小学校での対応を引き継ぎ、B中学校でも同様の対応ができるようにすること」「医師や作業療法士、理学療法士と連携すること」「校内では、看護師と介助員の連携をはかること」等で合意形成に至った。

#### 5. 合理的配慮の実際

- A生徒は自力移動が困難であるため、バギーや車椅子を使用して移動している。そのため、A生徒のためにスロープを製作した。また、A生徒の父親や祖父、教職員が、雨の日の登校でもA生徒が雨に濡れないようにするための屋根、通称「雨の日車椅子ステーション」（写真2）を建設した。【合理①-1-1】



写真2 雨の日車椅子ステーション

- 合理的配慮協力員からのアドバイスに基づき、通常の学級で学習する題材に合わせて、A生徒に対して他の生徒が語りかけるための紙芝居等の教材を作成している。【合理①-2-1】
- A生徒は、1日中校内で、寝た状態での姿勢で過ごすことが多いため、天気の良い時には、担任が付き添い、学校の周りを車椅子で散策し、自然や街並み、地域の人々と触れ合う機会や体験を得られるようにしている。【合理①-2-2】

#### 6. 本事例の成果と課題

成果としては、A生徒と小学校で共に過ごしてきた生徒から、「中学校になってA生徒はよく目が開くようになった。」「表情がいろいろでてきた。」ということを知る。これらの変化の要因は分からないが、少なくともA生徒が私たちの学校になくなくてはならない存在であるという実感を、生徒も教職員ももっている。

課題としては、生徒一人一人の学習の実態を多角的に把握する視点や教職員間の連携、支援を要する生徒の理解、生徒一人一人に応じた教材教具の作成などであり、これからもこれらの課題に一つ一つ取り組んでいきたい。